

世代から世代へと受け継がれてきた
飛騨の民俗芸術を、精緻な世界で描き続けた

玉賢三

昭和から平成に制作された
緻密なグラフィックや
写実的なイラストレーションが
会場に結集。



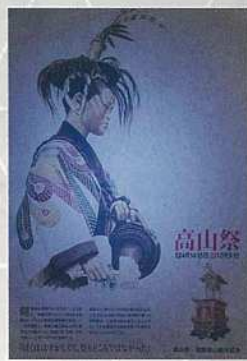
高山市が所蔵する美術品の
中から、高山を代表するグ
ラフィックデザイナー玉賢三
氏 故人のポスター作品を
展示公開します。くわえて
同一会場では、玉賢三氏の
作品を後世に伝えることを
目的として活動するクリエイ
イター集団 T+design
がプロデュースする『ほのあ
かりに浮かぶポスター展』
の展示も行います。ぜひご
覧ください。

白日のもと、すべてが等価に浮かび上
がってくる光と、何も見えない陰影の間。
陰影とは、想像のための余白と「ほのあ
かりに浮かぶポスター展」ではあえて暗
闇のなかに、作品を浮かび上がらせる
という実験をしました。
闇を包み、空間の中に浮遊することに
よって、作者の祈り、記憶、こころ、ひ
だの歴史など……。それは「見えない
ことを見る」行為でもあります。
これからは飛騨の情景に注視しながら、
見過ごしてしまつたものに焦点を合わ
せていきたいと思つています。
ぜひ多数の方に「来場いただき」はあ
かりに浮かぶポスター展」をお楽しみ
ください。
T+design



入場
無料

令和5年度高山市所蔵美術品展 ポスター 作品展と



あかりを通して広がる抒情的で美しい世界
ほのあかりに
浮かぶ
ポスター展
同時開催

令和6年3月2日(土) 24日(日)

午前10時〜午後5時 休館日5日・12日・19日
会場 飛騨・世界生活文化センター
〒島町900-1 ミニジウム飛騨内

主催 高山市
共催 飛騨・世界生活文化センター
指定管理者 飛騨コンソーシアム
T+design

問合せ先 高山市生涯学習課 0577-33513155

T+design Instagram



デザインと私。

玉 賢三

玉さんに聞く。

山本純一

高山は田舎といえども、江戸文化を今に残す歴史ある町で、四方は峠で囲まれ、その様子を「壺のような町」と花森安治さん（暮しの手帖の創刊者／故人）が称されてみえた。可憐な山野草のような飛騨高山で暮らしてきたお蔭で、お酒のラベル、切手や包装紙、手提げ袋や文化財の修復などの仕事が舞い込み、観光客の目を楽しませることができた。その中でも印象に残るのが、昔なつかしいボンネットバスだ。観光客用にと再運行されたバスの側面に、イラストレーションを描かせてもらうことができた。バスは高山で活躍したあと下呂温泉や馬瀬村でも走り続け、イラストレーションが郷土に根付いていくことがとてうれしかった。東京ではありえないことである。

回顧するような作品集には私の思いが色々詰まっているが、これが最初で最後の出版物となる。当初作品は制作した年代別に掲載する予定でいたが、イラストレーションからデザイン、マークやロゴとすべてを紹介しようとする間口が広くなる分、集約するのが難しくなった。試行錯誤の末、私の中の引き出しの中身を、多い順から見えて戴いた方がいいと決め、ジャンル別にまとめた。

この作品集から絵画とは異なるイラストレーションの楽しさと、アイデアや造形的な面白さを感じていただければ、この上ないよろこびである。

作品集『玉賢三の仕事』より転載

山本 アートディレクターと組んだポスターを見ると技巧の凄さはもちろんですが、玉さんはとても器用だなと感心しますね。岐阜の金華山のポスターとヨーロッパのクラシックな車を同一人物が描いたとは誰も思わないですよ。

玉 金華山は東山魁夷の世界観を意識しながら描いたんだけど、金華山という文字がレイアウトされたことでイラストが更に生きてくるよね。これは洋画・日本画なんかにはないことやね。

私の作品は水彩画がほとんど。日宣美に出品した鬮楽やソリ、鞍などは油絵のようにしたかったので厚塗りをしたが、金華山は細い面相筆で山の木々を、細かく塗り重ねた。一見して変化の少ない木々が集まって山を形作ると、情感のようなものがにじみ出てきて、それが金華山という山になっていく。

かたやクラシクな車を真横から描くという仕事では、かなり鮮明な写真を山本くんからもらった。私はスキーが大好きで、凍てつく冬の中を走る車とか、雪が凍みたバンパーとかを実際に見ている。車の中は暖房が効いて暖かいのだが、ドア一枚隔てると外は極寒という感じなどからだが覚えていてね。ただ、外観を似せて描くだけでなく、そういう感じも含めて描いているつもりだけど、それが簡単なようでなかなか難しかったな。

作品集『玉賢三の仕事』より転載

目で見えたものを似せる喜び。



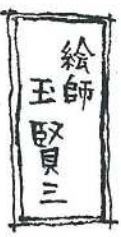
天井から降り下された零戦のモデル。玉さんは着い頃、予科練にいた。



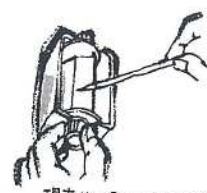
昭和36年から今日まで使用し続けているスライト。ボディのベアリング部分の劣化がひどい味を出している。



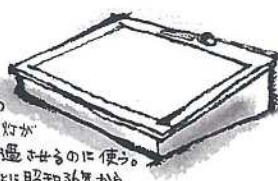
原稿をこのルーペで拡大しながら細部を観察し、イラスト化する。



通販で入手した拡大眼鏡。水中メガネのような感じで使う。拡大レンズが2枚ついている。



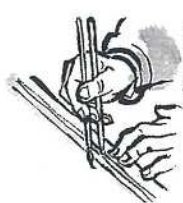
現在は0.3mmのシャープペンだが昔はまずは鉛筆の芯研ぎから仕事が始まる。



昭和36年、木製製のライトBOX。中に蛍光灯が入っていて、下絵を透過させるのに使う。懐行灯は驚いたこと、昭和36年から1回も切れたことがないという。



使いやす、その絵具をすばやく洗い落とせる工夫が凝らされている。



ガラス棒を使えば筆で細かい線の描画が直線からベタ塗りまで可能。水を文字や建築イラストのランなども描く。



左側がアクリル絵具。水溶性なので水だけで処理することができ、しかも乾くと水彩と違って耐水性になるからにじまない。まん中がもったいなくて使えないフランス製の水彩絵具。右側がアンバー色で使用頻度が一番高い水彩絵具だ。

T+design プロデュース
会場内では現存するアトリエの一部を展示いたします。

